

幼児教育と小学校教育の円滑な接続に向けて

～「幼保小の架け橋プログラム」で目指すもの～

茨城女子短期大学
助川 公継

1. 幼児教育と小学校教育を、どのように捉えるか

(1) 幼児期は、「土台づくり」の時期

- 「遊びこむ」体験から自己調整をする力が育つ（発達過程とかかわり方）
 - ・遊びから、言葉や数量、科学などの小学校での学びにつながる芽が生まれる
 - ・遊ぶ過程で学んだことは、心に刻み込まれる。
（色、形、大小、数、量、空間認識、比較、順序、時、お金などの基礎概念など）
- 幼児期から小学校にかけては、「できること」よりも「やりたいこと」を！
例： 文字を教えるより、「伝えたい」気持ちを育てる
ひらがなや漢字を書けるようにするより、保護者や先生とたくさん話すことで「語い」を増やすような取り組み
- 接続が円滑でないと、小学校での教育的な効果が十分に望めない。
 - ・幼児期は、伸び伸びとした環境で自己肯定感を育むことをめざす
→ 小学校入学後の慣れない環境やルールにより、できたことも難しくなってしまう傾向
 - ・幼児期の遊びは、主体性や伝え合う力、社会性、協同性、集中力の発揮に結びついている（子どもには、「自ら学ぶ力」がある）
- 小学校以降の土台として必要な力を共有する
例 ・語彙をふやす ・数と量の対応に気づく ・自己調整をする力

(2) 小学校入学当初は

- **前操作期・直観的思考段階**(4~7,8歳)(ピアジェの発達段階)
 - ・物事を関連付けられるようになる。直観に依存して判断するため、自己中心性やアニミズムという認知の特徴がみられる。直感に訴える提示などは有効。
 - ※ 自己中心性…自分から見た視点でしか物事を捉えられない。周囲に合わせる姿勢も育ってくるが、まだまだ成長過程
(例)自分が好きなものは、みんなも好きと思ってしまう
 - ※ アニミズム…自分と同じように無機物も生きてると捉えること
(例)机さんが「痛い、痛い」と言っているよ
- 小学校入学の頃から、自分の能力や性格を、他者との比較を通して評価するようになる。(人と比べて「走るのが遅い」「字が上手にかけない」などの得意、苦手意識が)
- 身体を絶えず動かし、活動的である
 - ・小さな子どもたちは、エネルギーで、活動的、落ち着きがないのは当たり前。
- 好奇心が強く、何でもよく見て、必要以上に関わりたくなる。
 - ・論理的な思考や冷静な判断力はまだ育っていないので、物事を直感的に捉える。
 - ・注意力の持続は短時間、物事への取り組み方は、断片的。
- 小学校低学年の学力差は、ほとんどが、「大切な先生の話聞き逃していた」、「授業に集中できない」、「最後までがんばれない」といった、「学びに向かう力」に関係していると言われている。

3

(3) 管理職の役割とカリキュラム・マネジメント

～ 1年生の時期を、どのようにとらえ、マネジメントするか？ ～

- ① 管理職は、「6年間の学校生活を通して、どのような児童を育てるのか。」というグランドビジョンのもと、入学間もない1年生の時期を、どのような時期と捉えているか、明確に伝える。
 - 【例】1年生…入門期「多様な体験を通して、学校生活に適応していく時期」
 - 2・3年生…移行・拡充期「活動を広げながら、多様な追求方法を身に付ける時期」
 - 4～6年生…充実・発展期「論理的に、総合的に考えたり、生き方を考えたりする時期」
(上越教育大学附属小学校)
- ② **カリキュラムをどのように構成していくか**
 - 幼児期の遊びを通じた学びが小学校の学習にどのようにつながっているのか
 - 主体性を大切にする生活科は、内容や方法において幼児期からの学びを生かしやすい
 - スタートカリキュラムの編成・実施
 - ・幼児期の生活に近い活動と児童期の学び方を織り交ぜ、主体的に自己発揮できる場面をつくる。
 - 接続カリキュラムは、幼児教育施設と小学校が目的を共有しなければ動かない。
 - ＜接続のテーマやねらい、課題を考える＞→合意形成→連携→接続へ
 - ・保幼小での「教育観」や「子ども観」を共有、できれば一致させる
 - どのような気持ちで取り組むかを共有。子どもの交流以上に、先生同士の交流を！
- ③ **保幼小の相互理解を図る**
 - それぞれの教育内容等を相手に伝えるだけでなく、相手の教育内容や指導方法を理解し、自らの指導を見直し工夫すること→自らの指導や子どもの学びを豊かにする

4

2. 幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)から

令和4年3月31日 文科省

(1) 幼保小連携の成果と課題

【成果】

- ・3要領・指針(幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領)の整合性確保
- ・幼保小接続期の連携の手掛かりとして「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を策定
- ・小学校との連携の取組を行っている園が約9割に上るなど、取組が進展

【課題】

- ・幼稚園・保育所・認定こども園の7～9割が小学校との連携に課題意識、各園・小学校における連携の必要性に関する意識の差
- ・半数以上の園が行事の交流等にとどまり、資質・能力をつなぐカリキュラムの編成・実施が行われていない
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が到達目標と誤解され、連携の手掛かりとして十分機能していない
- ・スタートカリキュラムとアプローチカリキュラムがバラバラに策定され、理念が共通していない
- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」だけでは、具体的なカリキュラムの工夫や教育方法の改善方法がわからない
- ・小学校側の取組が、教育方法の改善に踏み込まず学校探検等にとどまる ケースが多い
- ・施設類型の違いを越えた共通性が見えにくい
- ・教育の質に関するデータに基づき接続期の教育の質の保障を図っていくための基盤が弱い
→ 接続期の学びや生活の基盤の育成に大きな影響

5

(2) 基本的な考え方について

○ 学びの連続性を確保する上で、おさえておきたいこと

- ・5歳児は、0歳からの豊かな体験の積み重ねに支えられている。
- ・小学校1年生は、自分の好きなことや得意なことが分かってくる時期。
円滑な接続により、小学校での学びや生活が充実するよう、架け橋期のカリキュラムを工夫

○ 3要領・指針で示されている5領域は、幼児が生活を通して発達していく姿を踏まえて、発達の側面からまとめられたもの。

- ・各領域ごとに教育を行うのではなく、遊びを通して総合的に行う。
- ・遊びを通した総合的な学び (思いや願いをきっかけとして発展していく)
→ 感性を働かせてよさや美しさを感じ取ったり、不思議さに気付いたり、気付いたことやできるようになったことなどを使いながら試したり、いろいろな方法を工夫したりする
- ・小学校でも、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出そうとする児童の姿を実現するための方法として、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や各教科等の指導の工夫が求められている。→ 個別最適な学びと協働的な学びの充実にもつながる。

○ 家庭や地域とも連携協力し、架け橋期のカリキュラムを開発・実践していく必要がある。

- ・例えば、家庭との連携については、保護者との情報交換の機会や園・小学校の活動に関連した様々な機会を活用し、子供の日々の様子の伝達や収集、架け橋期の取組の意図の説明などを通じて、保護者との相互理解を図ることが考えられる。

6

(3) 架け橋期のカリキュラムのイメージ(6つの視点から考える)

6つの視点	5歳児	小学校1年生
	4月 …… 10月 …… 3月	4月 …… 9月 …… 1月 …… 3月
① 期待する子供像	どのような子供を育てたいのか	
② 遊びや学びのプロセス	主体的・対話的で深い学び	
③ 園で展開される活動/ 小学校の生活科を中心とした各教科の単元構成等	体験を通じた気づき 活動の主体は幼児であり、先生は活動が生まれやすく、展開しやすいように意図をもって環境を構成していく	自覚的な学び → 将来の探究へ 【スタートカリキュラムの考え方】 ・成長の姿 ・発達の特性 ・生活科(合科的・関連的) ・学習環境
④ 指導上の配慮	先生の関わり	・安心・安全な環境(子供目線、自己発揮できるような多様な環境) ・気づきを基に考えることを促す ・気づきの質の高まり(伝える、交流する、振り返る等)
	環境の構成・環境づくり ……	
⑤ 子供の交流	ねらいと振り返り ・ 自発的な関わり	
⑥ 家庭や地域との連携	小学校への期待・憧れ	自信をもって自分を発揮
	地域や保護者のニーズ、地域の強みや課題	

※「遊びや学びのプロセス」は、「育みたい資質・能力」に関連している。

7

◆ 教育や保育の質とは何か (「OECD 2006」を参考に)

方向性の質…保育の方向性や目標(国・政府が幼児教育に示す方向性の質)

構造の質…施設の条件、保育者:子どもの数

(教育の質を保障するための包括的構造: 法律または規制の制定や施行により保障)

教育の概念と実践…国の指針、園の指針(要領等に示される教育の理念と実践)

実施運営の質…園全体の連携、資質向上

(地域ニーズへの応答性、質の改善、効果的なチーム形成に焦点を当てた運営管理)

プロセス

過程の質…教師・保育者と子ども、子ども同士のやりとり、活動のための環境構成
(教師・保育者と子ども、子ども間の関係の温かさややりとりの質)

子どもの成果の質…成長の保障

(様々な発達の側面における育ちの質)

※ 教育や保育の質は子どもの育ちにとって重要

※ 全ての質は相互に関連し合っている

8

【参考】 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿 <10の姿> (幼稚園教育要領より)

領域	10の項目	資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿
健康	健康な心と体	幼稚園生活の中で、充実感をもって自分のやりたいことに向かって心と体を十分に働かせ、 見通しをもって行動し 、自ら健康で安全な生活をつくり出すようになる。
人間関係	自立心	身近な環境に主体的に関わり様々な活動を楽しむ中で、しなければならないことを自覚し、自分の力で行うために考えたり、工夫したりしながら、諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、 自信をもって行動する ようになる。
	協同性	友達と関わる中で、 互いの思いや考えなどを共有し、共通の目的の実現に向けて 、考えたり、工夫したり、協力したりし、充実感をもってやり遂げるようになる。
	道徳性・規範意識の芽生え	友達と様々な体験を重ねる中で、してよいことや悪いことが分かり、自分の行動を振り返ったり、友達の気持ちに共感したりし、 相手の立場に立って行動する ようになる。また、きまりを守る必要性が分かり、 自分の気持ちを調整し 、友達と 折り合いを付けながら 、きまりをつくったり、守ったりするようになる。
	社会生活との関わり	家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気付き、 相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ 、地域に親しみをもつようになる。また、保育所内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、 社会とのつながりなどを意識する ようになる。

9

領域	10の項目	資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿
環境	思考力の芽生え	身近な事象に積極的に関わる中で、物の性質や仕組みなどを感じ取ったり、気付いたりし、考えたり、予想したり、工夫したりするなど、 多様な関わりを楽しむ ようになる。また、友達の様々な考えに触れる中で、自分と異なる考えがあることに気付き、自ら判断したり、考え直したりするなど、 新しい考えを生み出す喜び を味わいながら、 自分の考えをよりよいものにする ようになる。
	自然との関わり・生命尊重	自然に触れて感動する体験を通して、 自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現 しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、 生命の不思議さや尊さ に気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切にすることを覚えるようになる。
	数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚	遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに 親しむ体験 を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの 必要感に基づきこれらを活用 し、興味や関心、感覚をもつようになる。
言語	言葉による伝え合い	保育士等や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを 言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし 、言葉による伝え合いを楽しむようになる。
表現	豊かな感性と表現	心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを 自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし 、 表現する喜び を味わい、意欲をもつようになる。

- ※ 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」は到達目標でない。
- ※ 個別に取り出して指導するものではない。(遊びを通し、発達の特性に応じて育っていく)
- ※ 手がかりとして関係者で話し合い共有してほしい。

10

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を核とした接続カリキュラムを！

アプローチカリキュラム 作成のポイント

保育の工夫

- ・主体的な遊び
- ・協同的な遊び
- ・体験の充実

時間の工夫

- ・見通しをもった生活
- ・時間の意識
- ・切り替えの仕方

円滑な接続に向けて

- ・交流の機会
- ・当番活動(人前で話す)
- ・道路の歩き方 など

家庭との連携

- ・生活習慣 ・食事のマナー
- ・生活のリズム
- ・交通ルール など

幼児期の終わりまでに 育ってほしい姿(10の姿)

- ・健康な心と体
- ・自立心
- ・協同性
- ・道徳性・規範意識の芽生え
- ・社会生活との関わり
- ・思考力の芽生え
- ・自然との関わり・生命尊重
- ・数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚
- ・言葉による伝え合い
- ・豊かな感性と表現

スタートカリキュラム 作成のポイント

週の目標を設定

時間割や学習活動を工夫

生活科を中心とした、 合科的・関連的指導 を意識する

家庭との連携を図る

安心して学べる環境 を整える

子どもの成長や幼児 期の経験を、学習活 動や生活に生かす

参考 「茨城県 保幼小接続カリキュラム」

11

◆ 「保育者はどんなことができるようになってほしいと願っているのか」 を知り、小学校ではどうすればよいかを考えること

→ つまり、「10の姿」を知り、それを活用していくこと

◆ 具体的には…

- 年長児と小1で、同じような活動がないか注目する。
 - ・例 植物の栽培(学びのプロセスを共有→どのような点で向上しているか)
- 3歳～5歳と活動を通して成長した点を、「10の姿」から考察し、さらに小1ではどのような姿になっていけばよいか考察し、活動を計画する。
- スタートカリキュラムでの発想を、教科指導につなげる。
- 小学校の教科の単元を取り出し、関連する幼児活動と「10の姿」の中から1つか2つを参照し、単元での活動などに生かす。
 - ・例、国語の絵本教材と幼児活動の絵本の読み聞かせで、言葉による話し合いの姿と関連させる。(10の姿の「言葉による伝え合い」を関連させて)
 - ・算数の足し算・引き算と幼児期の「数量の関心・感覚」との関連
- 指導の共通性と違い→逆に「違いを生かす」ことが発展につながる
- 全校・全園体制をつくる

12

アンケートの例【小学校入学期～1学期の終わりの姿】

※ 子どもや項目により、入学時から学期末まで異なってくる (できていない・4、ほぼできていない・3、まだできていない・2、できていない・1)

能力	要素	小学校入学期～1学期の終わりの姿	チェック
学びに向かう力	主体的に学ぶ力	小学校での過ごし方(生活のリズムや場所など)に慣れ、楽しく学校生活を送ろうとする。	4・3・2・1
		学習や生活の中の様々な課題の解決に向けて主体的に取り組もうとする。	4・3・2・1
		幼児期の教育を通して育まれた力を生かして、いろいろな方法で自分らしく表現しようとする。(全教科)	4・3・2・1
		学校の動植物や身近な自然に触れ、その美しさ・不思議さ・四季の移り変わり等から感じたことや気付いたことを表現しようとする。(国語・生活)	4・3・2・1
		本や文章を楽しんだり、想像を広げたりしながら読んだり、読み聞かせを聞いたりする。	4・3・2・1
		いろいろな運動や新しい体の動きに興味をもち、楽しんで挑戦しようとする。(体育)	4・3・2・1
人と関わりながら学ぶ力	人と関わりながら学ぶ力	絵や図、言葉や文で、自分の思いや考えを表現し、互いの考えを聞き合いながら学習や活動を進めようとする。	4・3・2・1
		相手のことを想像したり、伝えたいことや伝え方を選んだりする。	4・3・2・1
		新しい友達と進んで関わり、互いのよさを生かしながら学習に取り組もうとしている。	4・3・2・1
		友達と話し合いながら自分たちの生活を工夫したり楽しんだりしようとする。	4・3・2・1
数量、図形、文字への関心	数量、図形、文字への関心	鉛筆の持ち方に気を付け、丁寧に自分の名前やひらがなを書く。(国語)	4・3・2・1
		言葉のまとまりを意識してひらがなを読んだり、書いたりしようとする。(国語)	4・3・2・1
		いろいろな観点をもとになかま集めをする。(算数)	4・3・2・1
		10までの数を数えたり数字を読んだり、順番や物の位置を数で表したりする。(算数)	4・3・2・1
生活上の自立	規則正しい生活	■「早寝・早起き・朝ごはん」の生活リズムを身に付ける。	4・3・2・1
		■一日の流れや時間を意識し、見通しをもって生活しようとする。	4・3・2・1
		場に合わせて身支度をしようとする。(給食着や雨具の後始末をする 等)	4・3・2・1
		食事の大切さを学び、給食の配膳や後片付けができ、給食を楽しむ。	4・3・2・1
		学習用具の準備や後片付けなど、自分のことが自分でできるようになる。	4・3・2・1

13

生活上の自立	健康で安全な生活	休み時間には屋外で遊ぶなど、丈夫な体をつくり、病気の予防に努めるようになる。	4・3・2・1
		いろいろな食べ物や栄養に関心をもち、好き嫌いをなく食べようとする。	4・3・2・1
		施設や公共の場所のルールやマナーを守るようになる。	4・3・2・1
		危険を予測して、自分や友達の身を守ろうとする。	4・3・2・1
心との成長	人との関わり	集団の一員として、適切に行動しようとする。	4・3・2・1
		気持ちのよいあいさつや返事、相手を考えて言葉遣いを心がける。	4・3・2・1
		話を落ち着いて最後まで聞くようになる。	4・3・2・1
心との成長	自身の心の成長	自分の物だけでなく友達の物も大事にする。	4・3・2・1
		新しい学習や活動に、意欲的に取り組もうとする。	4・3・2・1
		■自分なりの目標をもって進んで挑戦しようとする。	4・3・2・1
	人との関わりを通じた心の成長	思うようにいなくても、くじけずに取り組もうとする。	4・3・2・1
		学校の約束やきまりを知り、よいことと悪いことを考えながら行動しようとする。	4・3・2・1
		友達と一緒に活動する中で、お互いを理解し、仲良く助け合おうとする。	4・3・2・1
		トラブルになったときに、自分たちで解決しようとする。	4・3・2・1
		自分のことを大切に、相手のことも大切にしようとする。	4・3・2・1
		新しい友達や先生、上級生や地域の人々など、様々な人と触れ合うことを楽しみにする。	4・3・2・1
	様々な経験に基づく心の成長	学校生活を支えている人に関心をもって関わり、感謝の気持ちをもつ。	4・3・2・1
		新しい友達と仲良く助け合おうとする。	4・3・2・1
		■動植物の世話等の体験活動を通して、命を大切にすることを学ぶようになる。	4・3・2・1
いろいろな友達と協力して活動する楽しさを味わう。		4・3・2・1	
幼児期の教育を通して身に付けたことを生かしながら学習や生活をしようとする。		4・3・2・1	

〈活用の仕方〉

○ それぞれの項目について、実態を踏まえチェックし傾向を分析し、今後生かす。

14

3. 幼児教育と小学校教育

【教育の特徴】

	幼児教育	小学校
教育のねらいや目標	方向目標 「～味わう」「感じる」等の方向づけを重視	到達目標 「～できるようにする」といった目標への到達度を重視
教育課程	経験カリキュラム (一人一人の生活や経験を重視)	教科カリキュラム (学問の体系を重視)
教育の方法等	各領域の区分なし(総合的な指導) 個人、友達、小集団 「遊び」を通じた総合的な指導 教師が環境を通じて幼児の活動を方向づける	各教科などの区分あり 学級・学年 教科等の目標・内容に沿って 選択された教材によって教育が展開
大切にしたいこと	幼児が遊び込むことができる環境を構築し、幼児の主体的な活動を促す	教育すべき内容を具体化し、効果的な指導を行うことにより児童が目標に到達することができるようにする

【用語の共通理解】(概念規定)

「援助」→ 発達の程度や個人の特性に応じて、代わりにやって助けること。(与えるというニュアンス)

「支援」→ 本人ができるように力を貸して助けること、最終的に自分でできるように支える
(主体的行動を引き出すことを重視)

「指導」→ 支援の延長上にあり、新しい能力やスキルや活動を身に付けることが中心。指導は支援があつて初めて効果を発揮する。

「遊び」→ 楽しく、自発的なもの。ルールを覚え、計画性、他者との協調、思いやり、行動力、企画力、責任等これらの要素が複合的に組み合わせたもの。

15

◆ 円滑に接続するためには…

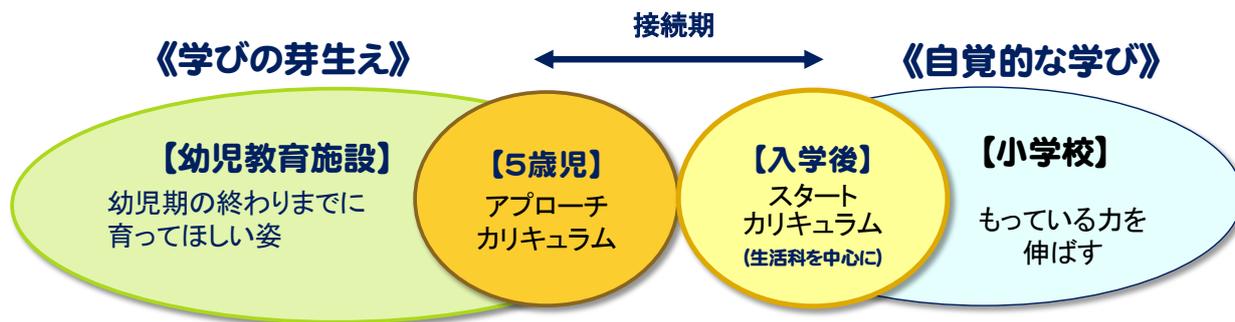
- 遊びの中での学び
- 時間より満足度による区切り
- 5領域の総合的な指導



- 国語、算数などの教科学習
- 時間で区切られた授業
- 教室での座学が中心

『つなぐ』ための手立てが必要！

- ・時間…45分という枠。昼食が遅い ※ 基本は心(非認知能力)の育成
- ・空間…教室という空間、遊び道具、絵本
- ・仲間…知らないお友だち、活発な子、おとなしい子、安心感
- ・自由度…座る・集中・我慢、興味関心の対象は？



16

4. 接続のためのマネジメントは？

幼児教育施設

【どのレベルで、何をつなぐか】

小学校

園内リーダー

- ・園長
- ・教頭(主任)
- ・担任
- ・支援員

- ・**組織をつなぐ (組織間の連携・調整)**
管理職の役割、接続コーディネーターの役割
統括的なマネジメントは誰がするのか？
- ・**人をつなぐ**
教員研修(相互理解・相互参観)
子ども同士、保護者同士、地域との関係
- ・**育ちをつなぐ**
発達の個人差、身体の育ち、心の育ち(自立)食育、特別の配慮や支援を要する園児等
- ・**学びをつなぐ**
幼児期の終わりまでに育ってほしい姿
興味関心、それぞれの特色ある活動等

接続コーディネーター

- ・校長
- ・教頭
- ・教務主任
- ・研究主任
- ・生徒指導主事
- ・特別支援コーディネーター
- ・担任
- ・養護教諭
- ・栄養教諭

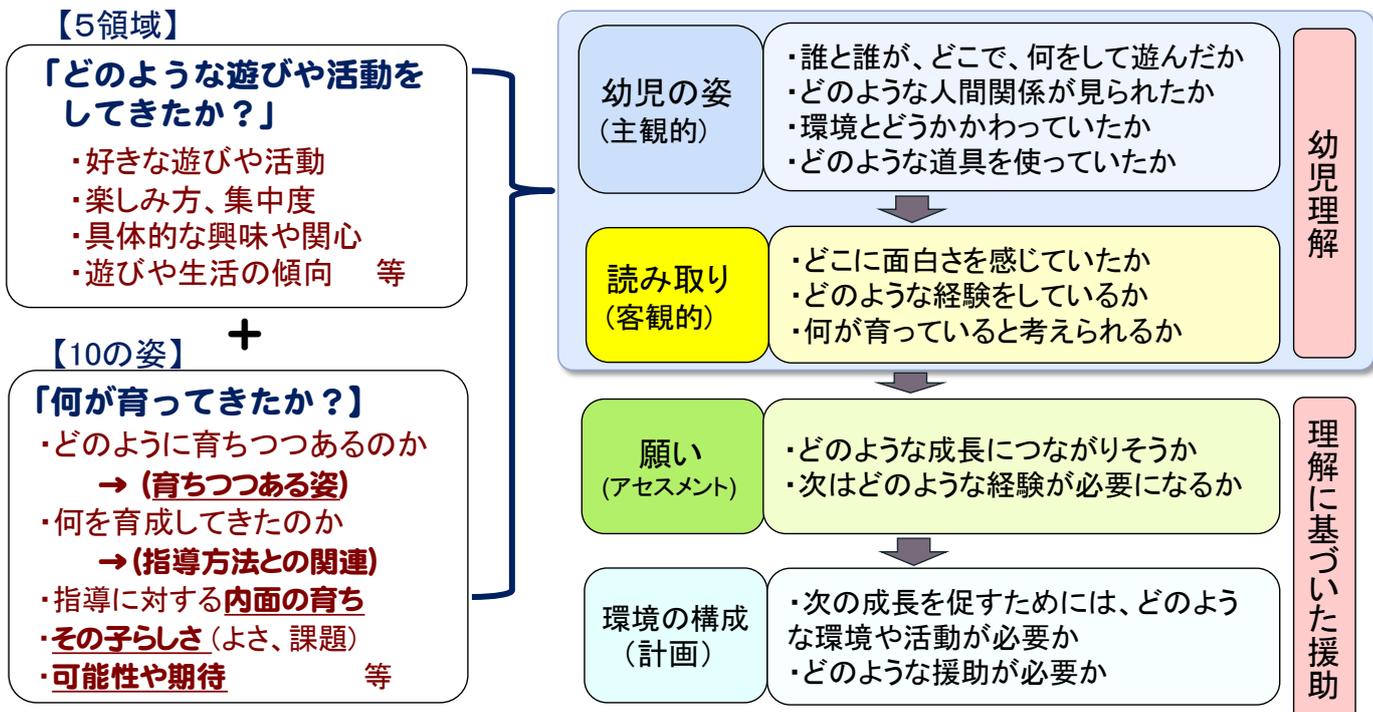
【配慮すべき事項】

- ① トップリーダーを中心とした役職ごとの役割
- ② 組織について、指導体制、運営体制
- ③ 接続のための研修内容・体制
- ④ 保護者や地域・自治体との連携
- ⑤ 小学校では時間に関する運用 等

R4より
主幹教諭
指導教諭

【幼児理解に基づく評価】 ～記録を通した見える化～

参考：『これからの幼児教育』2019・春号
ベネッセ： 聖心女子大・河邊貴子



「遊びや生活の中で、どのような力が育っているか、育ちきっていないか」を観察し、見抜き、評価内容として次へつなげていく。(カリキュラム・マネジメント)

- 「〇〇の場面では〇〇に興味をもち、見通しをもって行動しようとする姿がみられるようになってきた」
- 「〇〇の場面では、相手の立場に立って、話を聞き、伝えようとする態度が見られるようになってきた」

5. 接続カリキュラムの作成について

「期待する子どもの姿」の共有

アプローチカリキュラム

スタートカリキュラム

(1) 幼児期の育ちや学びの可視化

- ・幼児期の終わりまでに育てたい子どもの姿(期待する児童の姿)を考える。
- ・個々の育ちと学びを捉える。

＜幼児の発達や学びを理解する＞

- ・「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」を踏まえる → 育ちつつある姿を共有
- ・幼児の発達や学びの姿を把握する

(2) アプローチカリキュラムの構想

【前期】 半年前(10～12月) 就学前健康診断
※ 見通しやめあてを持って取り組む時期
※ 就学する小学校との交流や連携

【後期】 就学間近(1～3月) <例. 学校ごっこ>
・子どもの発達や特性に応じた活動を作成
・子どもの育ち等に関する保護者との情報共有

相互の検討と振り返りをしっかりと！

■ 一人一人の発達や学びの姿からデザイン

- ・発達や学びの個人差に応じた、きめ細かい指導
- ・「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」を考慮

■ 児童の発達の特徴を踏まえた時間割や学習活動の工夫

- ・短い時間の活用, 具体的な活動の伴う学習
- ・ゆったりとした時間の中で活動を見守る

■ 生活科を中心に合科的・関連的な指導の充実

- ・関わりを通して総合的に学ぶ
- ・意識の流れに配慮したつながりのある学習活動

■ 安心して学べる学習環境づくり

- ・人間関係や学習のきっかけづくりなど, 児童を取り巻く学習環境を見直す

(3) 活動内容の検討と作成

- ・具体的な活動内容・環境構成の工夫
- ・保護者の不安解消や期待へつなげる
- ・これまで興味や関心をもったことを生かす

(4) アプローチカリキュラムの実践

就学への期待感、「できる」・「できた」の体験

19

6. 保幼小接続に向けての具体的な取り組みについて

茨城県教育委員会「学校教育指導方針」に加筆

小学校教育

幼児期の取組を活かしたスタートカリキュラムの工夫

交流活動

- ・交流のねらい、参観の視点の明確化(やってあげる、お招き → 一緒に活動)

教育内容や指導方法の違い・共通点の相互理解

相互参観

- ・一日入学等、子どもの体験交流
- ・教員の保育体験、保育者の小学校訪問

事例の持ち寄り

- ・活動の様子を紹介(写真等を用いた説明)
- ・面白がっていたのはなぜか
- ・活動の効果と子どもにとっての成果は？
- ・どのような力を育て、伸ばしたいかの共有

育てたい姿や身に付けたい力の共有

意見交換

- ・引継ぎで大切にしたいこと(何が育ちつつあるか、どのような活動が効果的か)
- ・保護者の視点(不安や期待など)
- ・書面のみならず口頭で伝える場も！

子どもの発達を長期的な視点で考える

指導要録等の活用

スタートカリキュラム等改善のための協議

- ・「もっとも大切にしたいことは何か」を共有
- ・生活科を接続を意識した教科へ
- ・子どもの実態に即したものになっているか

双方の取組を振り返る

幼児教育

「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」を踏まえたアプローチカリキュラムの工夫

※ 近隣の保育所・認定こども園・幼稚園等と連携

20

◆ 接続に向けての連携を推進するには…

○ 様々な課題が…

- ・交流や連携のための日程調整や時間確保が難しい。
(交流活動の準備や振り返りの時間が確保できない)
- ・入学前には情報交換をしたが、入学後の児童の様子については行っていない
- ・交流・相互参観の計画が、年間計画に位置付けられていない
- ・教師主導になりがち(子どもたち自身の手で計画がなされていない)
- ・複数の小学校へ入学する(複数の幼児教育施設から入学してくる)

○ どうすればよいか

- ・年間計画の中に、「いつ」、「誰が」、「何を行うか」などの計画的な位置づけや担当者などの役割分担を、前年度に無理のない範囲で位置付けておく。
- ・複数の園から受け入れる場合、まずは、どこか一つの幼児教育施設と交流を始めてみる。「近くにある」、「入学児童が多い」、「声をかけやすい」など、選定基準を難しく考えず、交流しやすい施設とまずは始めて見る。できれば、行政側と相談しながら行うことも大切。
- ・小学校は忙しいのでは…という声がある。できれば小学校側から、声をかけてみては。
- ・「育てたい力」「体験させたい活動」「教員の援助やかかわり」など、意見交換や協議の機会の確保を。個々の子どもの情報交換の際に、ぜひ位置付けてほしい。
- ・子どもや教職員の交流だけでなく、「家庭との連携」や「保護者の期待や不安に応える子育て支援」等、保護者の視点を取り入れる。(PTA主導で行うことなども考えてみる)

21

○ 「保護者が不安に感じていること」への対応

- ・45分間 座る経験を、これまでしたことがない…
- ・身支度や準備がテキパキできずに心配…
- ・先生の話をしっかり聞けないんじゃないか…
- ・ひらがな、カタカナは書けるようにしたほうがいいのかな…
- ・小学校に行ったときに自分でお友達できるかな…

不安を解消するには
どのような工夫を
すればよいか？

○ 保幼の取り組みを生かした小学校の在り方

- ・幼児教育の環境にならい、一人一人が安心して自己を発揮できる場をつくる。
- ・(指示やルールはあるが)自分で考えて解決する。
- ・教科の学習は、できる限り子どもの興味や関心を出発点として…
- ・保幼小の先生の交流や情報交換を活性化する。
(顔と顔をあわせることで、当事者意識が生まれる)



「子どもを育てる」から「子どもが育つ」学校へ

22

7. 最後に

○円滑な接続に向けて

- ・「**幼保小の架け橋プログラム**」は、これまで行ってきた**接続の質の改善を目指すもの**。
- ・幼保小が協働して「**期待する子供像**」や「**育みたい資質・能力**」を明らかにし、「園で展開される活動」や「小学校生活科を中心とした各教科の単元構成等」を具体的に明確化していくこと。
- ・幼児教育施設（保育所・幼稚園、認定こども園）と小学校が**目的を共有**しなければ動かない。
＜互いに接続のテーマやねらい、課題を考えること＞→合意形成→連携→接続へ
子どもの興味関心を尊重する→ **子どもの主体的な活動**（子どもを観察し活動を援助する存在）

○育ちと学びをつなぐ視点

- ・「何ができるか」より、「何を体験してきているか」→ その結果、何が育ちつつあるか
- ・「小学校1年に上がるまでには、このような体験が求められる」というような指標があれば…。
- ・（遊びの中での、気づきから探究へといった）**学びのプロセス**を大切にすることが、小学校以降に豊かな学びとしてつながっていく。
- ・育ちつつある姿を伝えていく努力を！（交流、連携、記録（要録）などを通して可視化を図る）

○「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」と小学校への接続の強化

- ・「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が示されたことで、小学校との協議が充実しつつある
- ・特別な支援を要する子については、十分な情報交換、保護者の思いを踏まえ丁寧な連携を！
- ・＜保幼小の違いを知る＞ → ＜（共通の思いを）共有する＞ → ＜（育ちを）つなげる＞
- ・接続カリキュラムの工夫（期待する子どもの姿の共有、相互に検討する場を！）

- 幼児教育の要素を小学校にどう取り入れるか、幼保小接続をグランドビジョンの中にどのように位置づけるなど、トップリーダーの校長がキーパーソンである。